



第127号

2024年6月28日

◆ 発行 ◆

名古屋労災職業病研究会

名古屋市昭和区山手通 5-33-1 杉浦医院 4 階

TEL & FAX : 052-837-7420

e-mail : roushokuken@be.to

<http://nagoya-rosai.com/>



金田彦三郎さん（71歳）は、アスベスト吹付作業が行われた直後の建造中の船内でスプリンクラー配管の点検作業をしている時に大量のアスベストにばく露したことから石綿肺を発症しました。（2024年5月9日新潟市内 関連記事 P2～P8）

127号目次

- ✎ 「見えねえけど、いげっていければ、いぐしかないです」
新潟鐵工所で働き石綿肺を発症した金田彦三郎さん P 2 ～ P 8
- ✎ 石綿肺に罹患した福田文夫さんがニチアスを相手取った
損害賠償裁判の控訴審は1回で結審 P 9
- ✎ 福井市で2年ぶりに相談会と交流集会を開催 P10 ～ P11
- ✎ 追悼 右田孝雄さん P12 ～ P13
- ✎ 事務局からのお知らせ P14

見えねえけど、いげっていかれば、いぐしかないです

新潟鐵工所で働き石綿肺を発症した金田彦三郎さん



石綿肺の治療を受けている金田彦三郎さん（71歳）は、新潟東工業高校機械科を卒業後、新潟鐵工所に就職し、造船や鉄道車輛製造の現場でアスベストにばく露しました。石綿肺は、アスベスト粉じんの吸入により引き起こされるじん肺症で、肺に細気管支周囲繊維化の形で始まり、進行性のびまん性（一面に広がる）繊維化をきたす疾患です。石綿肺は、アスベストばく露が終わった後でも進行し、呼吸困難を引き起こすことが多くあります。

金田さんは、在職中の2009年頃から定期的に自宅近くの西新潟中央病院で経過を観察してきましたが、2021年の5月か6月に胸部画像を見た女性医師より「肺の下半分が急に濃くなり悪くなったわね」と石綿肺の急性増悪を指摘されました。医師は、薬で抑えるしかないと言い、それ以来、朝と晩にオフェブカプセルという肺の繊維化をおさえる作用のある薬を毎日服用することになりました。医師より薬価が「すごい高い薬ですよ」と言われたことから、金田さんは、「それじゃあ大変だから先生なんとかしてくださいよ」と頼みました。医師は、「新潟市は老人に優しいから」と言い、3級の身体障がい者手帳の交付を受けると、薬代や在宅酸素療法の機器や酸素が無料になることを教えてくれました。金田さんは、身体障がい者手帳の申請をするための検査を受けるため1週間入院しました。検査では、肺の内視鏡検査や水を入れる検査を受けましたが、肺の内視鏡は、胃カメラより10倍は苦しいと感じ「すごく苦しく、死ぬかと思いました」という体験になりました。検査後、新潟市に身体障がい者手帳の申請を行い、3級の手帳が交付されたのは、2021年10月14日でした。筆者が金田さんの身体障がい者手帳を見せていただいたところ、じん肺症による家庭内での日常生活が著しく制限されるものという記載がありました。

金田さんは、かつて新潟鐵工所新潟造船工場と一緒に働いていた同僚達が、次々とアスベストばく露が原因の病気で亡くなっていったことから、自身の肺の状態について2009年頃から西新潟中央病院で経過を見てきました。最初に亡くなった同僚は、2002、3年に53、4歳で肺がん亡くなりました。同僚たちは、「煙草は吸っていたけどこんな急にぽっくり行くわけねえよな」と話していました。金田さんは、マスコミがアスベストについて騒ぎだしたのは2005年からだとはっきり記憶していますが、「そこから急にみんなあれ死んだの石綿じゃないか」と言うようになったと筆者に話しました。1年、2年、3年、時間の経過とともにまた一人また一人と同僚が亡くなっていきましたが、「病名は石綿らしい」と同僚達の間に話が広まっていました。2005年は、兵庫県尼崎市のクボタ旧神崎工場内とその周辺地域にアスベスト疾患の患者が発生していることが報道されたことが契機となり、アスベスト健康被害への社会的関心が集まることになったクボタショックが起きた年でした。

2001年に新潟鐵工所が経営破綻した後、鉄道車輛・新交通システム、除雪機械、産業用車両の製造部門は石川島播磨重工業（現：IHI）に営業譲渡されることになり、2003年に新潟トランスが設立されました。金田さんが新潟トランスに勤務している時、中皮腫を発症した同僚が会社に労災保険請求への協力を求めたところ、新潟鐵工所時代のアスベストばく露に関係する労災は、受付をしてくれませんでした。金田さんは自分で申請に行かなければならないのかと思い、会社を休んで新潟労働局へ3回程足を運び相談し、2011年7月15日に石綿健康管理手帳を交付してもらいました。その2年程前から、同病院で3回程、自費で検査を受けていました。

2011年8月15日に西新潟中央病院でじん肺健康診断を受け、新潟労働局にじん肺管理区分決定申請を行ったところ、胸部エックス線写真に第1型の石綿肺が認められたことからじん肺管理区分管理2の決定を受けました。じん肺手帳は、2011年11月24日に交付されました。現在、金田さんは、じん肺手帳と石綿健康管理手帳による健康診断を6月と12月の年2回受けています。じん肺手帳の検査結果を記入するページには、医師により石綿肺のスタンプが検査毎に押してあります。

金田さんは、1953年3月1日に新潟市東区臨港町に生まれました。当時新潟市で街だったのは、現在の中央区本町、古町界隈と金田さんの実家のあった信濃川対岸の山ノ下付近のみで後は田んぼや沼地が広がっていました。金田さんの家から歩いて10分程のところに新潟鐵工所新潟車両工場、後の大山工場がありました。筆者が生まれた場所を聞くと、金田さんは、新潟地震の時はすごかったですよと話し始めました。新潟地震は、1964年6月16日午後1時1分40秒に、新潟市の北北東に当たる粟島の南西の海底深度約40kmを震源として発生したマグニチュード7.5、震度は新潟市を中心に5ないし6を記録した地震です。当日の天候は快晴、気温22.2℃、風向は西、風速は5.2m/sでした。

小学校6年生だった金田さんは、桃山小学校の2階建ての木造校舎で地震に被災しました。「もの凄い揺れで、みんなしてぶったまげてワーンと階段を下りてグラウンドに集まってそこに2時間くらいいたかな」と地震発生時のことを話してくれました。小学校周辺は、液状化により砂や泥が噴き出し大変な状況でした。地震発生直後に昭和石油新潟製油所新工場構内のタンクヤードにおいて5基の石油タンクがほぼ同時に炎上しました。金田さん達は、避難誘導されたことから小学校から歩いて1時間程のところにある物見山に避難し、1晩を朝までそこで過ごし、炎上する石油タンクを眺めていたと言います。タンク炎上の原因は、浮屋根式タンクの屋根の衝撃によって火花が発生したことによる着火でした。5基の石油タンクはその後2週間燃え続けることになります。金田さんには、津波で信濃川河口付近にあった漁協の魚を入れる木の箱が流され道一面に広がっている様子も記憶にあります。

昭和石油の石油タンクの炎上から5時間後の午後6時、昭和石油新潟製油所及びその東に隣接する三菱金属新潟第1工場の境界付近にあった倉庫内に貯蔵されていた金属鉄粉が、津波や湧き水により発生した海水との接触により爆発したことにより火災が発生しました。火災は、両工場を全焼したのち、西の隣接地にあるアジア石油新潟油槽所、新潟食油工業などの他、金田さんの自宅のあった臨港町の民家約300棟に延焼し、これらを全焼しました。そして、出火から5日後の6月20日午後5時頃鎮火しました。この火災による焼失建物面積は58282㎡、焼失区域面積は235000㎡に達し、焼失油量は32380㎥、焼損タンク数は138基でした。(横浜国立大学北川徹三名誉教授、新潟地震における石油精製工場第1火災及び第2火災の原因)。

300棟の臨港町の民家が焼失しましたが、金田さんの家は、どういうわけか角地で焼けずに偶然残りました。ただ、石油タンクから流出した真っ黒な原油が家の壁一面に張り付き、使い物にならなくなっていました。金田さんのお父さんは、柱以外は全部壊して家を作りなおしましたが、後に、「新しく建てた方が安かったな」と言っていたと言います。地震発生後、金田さん一家は、2か月間を親戚の家で過ごしました。親戚の人は、戦死した弟が、戦地へ行くまで長く金田さんのご両親の家で世話になったことがあったことから、うちに来てくれと言ってくれました。

金田さんは、「なんだかんだ言たって元に戻るまで10年かかりましたよ」と言い、石油タンクから流出した後、津波や湧き水で広がり土にしみ込んだ油の匂いが取れず、10年間くらいは夏になると原油の匂いが下からあがってきた話をしました。

家が焼けた人々は、仮設住宅などに引っ越して誰一人戻ってこず、何百軒もあったうち、

残ったのは20軒ほどでした。金田さんは、「仲間が引っ越したんで遊べないんですよ。寂しい思いをしましたけどね」と話し、今では、「ほかのところで地震が起きると復興するのに10年はかかるなと思う」と話してくれました。金田さんは、新潟市の復興を見ながら青春時代を過ごすことになります。

1971年3月、県立新潟東工業高校機械科を卒業した金田さんは、新潟鐵工所に就職しました。当時は、「新潟では名前もあるし、入っていれば食いはぐれねー」と言うことで先生も親も鐵工所、鐵工所という感じでクラスの3分の1が新潟鐵工所に就職していた」ということでした。金田さんが新潟鐵工所に内定した時は、鉄道車輛等の製造をしていた自宅近くの大山工場に配属される予定でしたが、入社直前に金田さんを含む7、8人が会社に呼ばれ、「これからは造船が忙しくなって大変だから、君たちは造船に行ってくれ」と言われ、新潟市入船町にある新潟造船工場に配属されることになりました。金田さんは、天気の良い日は自転車で通勤しましたが、信濃川対岸の新潟造船工場までは7.5キロ、22、3分の道のりでした。バスで行くと1時間かかりました。

入社後は、ガス切断や電気溶接の練習や図面から原寸の型を作成する現図場等4、5か所を回り研修をしました。最終的に金田さんは、エンジン場(機関室)以外の甲板の配管を施工する部署に配属されました。入社して2か月程してから「鐵工所で初めての外国貨客船ができるんでお前たちには、そこ行って仕事してもらおうかな」と言われました。当時、新潟造船工場では、200～300トンクラスの漁船の建造を主に行っていましたが、外国貨客船は、長さが100メートル以上ある2,000トンクラスの船でした。金田さんは、「漁船メーカーでしたから、ノウハウなんかなかったんじゃないですかね」と言い、「入社してちょっとして、でっかい Dock が出来てからは、どんどん外国船が来始めましたが、客船作るノウハウなんかなく、別の大手のメーカーに勉強させに行かせるわけでもなく、昔だからただやれで、右往左往するばかりでしっちゃんかめっちゃんかでしたよ」と当時を振り返りました。

当時の新潟鐵工所は、全社的な輸出拡大政策のもと、造船部門も輸出船の受注拡大をもくろんでいました。1973年に発生した石油危機による国内漁船の建造意欲の減退は、これに拍車をかけました。金田さんが入社した頃の新潟造船工場は、2,500総トンの建造が限界でしたが、入社翌年の1972年10月には50トン門型クレーンを備えた5,000総トンビルディング Dock が完成し船舶建造能力が一気に向上しました。そして、1970年代の10年間で合計68隻の客船や漁船、作業船、貨物船、特殊船が輸出されていきます。フィリピンに輸出された2,300トンの貨客船「DON JUAN」の竣工は1971年9月でした。翌年1月には、香港に輸出された2,140トンの客船「TAI SHAN」が竣工しています(新潟鐵工所100年史)。

金田さんは、入社して2年か3年した頃から外国船内の人間が立ち入る区画の壁や天井全てにアスベスト吹き付けをするようになったと記憶しています。配管艤装工だった金田さんは、アスベスト吹き付け作業が終わった直後に、全ての部屋に取りつけられたスプリングラーの配管がちゃんとつながっているかの点検をするために船内に入りました。配管の点検作業は、暗い船内に脚立を立て、手探りで行いました。点検作業は、大工さん達がポートをはる内装工事前に行わなければなりませんでした。当時のスプリングラーヘッドは、火災により温度が上がると内部のアルコールが膨張してガラスが割れて水が出る仕組みでした。

アスベスト吹き付け直後の船内について金田さんは、「(アスベスト吹き付け材を)吹いてる連中は、マスクしてビニールで囲ってあるからそんな直に吸うわけじゃないですよ。(私たちは)彼らが吹き終わってビニール外した翌日から入るわけですけど、船なんて鉄のかたまりで覆われているから、風も入ってこないからずっと石綿が残っているわけです。電気付けなければ真っ暗闇で、普通の100ワットの電球をつなげてやっているだけで暗闇にちょっと

光があるぐらい。そういうところで作業してましたからね、相当、アスベストが漂っていたんじゃないですかね」と話しました。そして、「だからね、溶接とかマスク持っている職種の人はいいですよね。我々配管とか、板金屋とか電装関係の人とかマスクなんて無い訳です。(アスベストを)吹き終わってもうもうとしているところに入って作業するわけだからいっくらなんでもマスクいるんじゃないかとかみんなで言ってね。マスク探してこいとかいったけどどこいったてある訳ない。マスクあるところ言ってマスク貸してくれと言っても、お前に貸す余分なんてないって断られてね」と続けました。金田さんは、「びっしり(吹き付け材を)吹くわけだから、電気付けたって、(粉じんが)漂っていてほとんど見えねえの。そういうところで作業するからびっしり体中に石綿が付くわけです。見えねえけど、いげって(行けの新潟弁)いければ、いぐしかないです。仕方ないからみんな入る。実際何して行ってるのか分からないの」と話しました。点検作業は朝から晩まで。会社が終わって帰る時は鼻の中が真っ白でした。作業は、1船舶につき1週間もありませんでしたが、次の船が入ってきたらまた、同じ作業をしました。金田さんは、スプリンクラー配管の点検作業の時にマスクをきちんとしていれば、今のように石綿肺にならなかったと考えています。

船舶の船体が出来あがると、船台から降ろして海に浮かべ、新潟造船工場の艀装岸壁で船内の装備や機器、配管の取り付けや電装、内装工事などの艀装工事を行うことから、アスベスト吹き付け作業は艀装岸壁に船舶が接岸している時に行われました。吹き付け作業は協力会社の作業員が行っていました。

金田さんは、エンジン場以外の全ての配管工事を担当しました。配管は、燃料を燃料タンクに甲板から給油するために何本も設けられた燃料配管、各デッキに設けられた雨が降った時のための排水管、居住空間の洗面所まわりやトイレまわりの配管など全ての配管でした。船の配管の接合部はほとんど溶接で取り付けられたフランジだったので、配管をつなぐときはアスベストを含有するガスケットを入れてボルトで締めていました。金田さんは、「スパナでフランジのボルトを締める作業を朝から晩までやっているわけだから、腕相撲では誰にも負けませんでしたよ」と回想しました。当時、金田さんのような配管工事に従事する工員は、40人か50人かもっといたということで輸出船の建造が始まっていたことから20歳前後の従業員が新潟鐵工所の内燃機工場、工作機工場、鑄造工場等から集められていたということでした。

現在では、配管を工場で製作してから船舶内で取りつけますが、金田さんが新潟造船工場で働いていた頃は、図面が線図だったので現場で型を取って自分で配管の長さや曲げ方、通し方等、収まりを決めなければなりませんでした。型は、型棒と呼ばれていた径が9mmの柔らかい丸棒で行っていました。型を取った後は、新潟造船工場内の配管工場で自分で5,500mのSGPガス管を切断し曲げて作成しました。工場には、配管を曲げるための油圧ベンダーという長さが6m程で高さが9m程の巨大な機械がありました。一番太い配管で5インチ(12.7センチ)でした。韓国に輸出した1,500トン~2,000トンクラスのトロール船の網を巻きあげる油圧モーターに使用する油圧管の場合は、SGP配管ではなく肉厚の配管を使用しましたが大変重い配管で、金田さん達若い配管工しか持ち上げることができませんでした。配管艀装作業は大変な肉体労働で、夏に風も扇風機も無い中で、合わない配管をガスで焼きのばす作業を全身汗みどろになって行ったりしました。体力が持たず辞めていく人もおり、金田さんは、「せっかく鐵工所入ったのにかわいそうでしたね」と話してくれました。金田さん曰く、新潟造船工場は、「典型的な3K職場」で、事故で毎年1人は亡くなっていたといえます。艀装岸壁に接岸された船の隣に着けられた船に渡ろうとした作業員が転落をしたり、船内足場が崩れ作業員が半身不随になったり、船内に吹付けられた発砲スチロールに引火して火災が発生し作業員が煙に巻かれたり、工場内を走っていたダンプと作

業員が接触する事故等が記憶に残っています。

金田さんは、船舶の試運転に乗船することがありました。トロール船が完成した後、佐渡島に向けて航行しながらスピードを上げたり、蛇行させて揺らしたりしながら操船し、魚のいないところを狙って網を下し引っ張りましたが、底引き網なので結構魚が入りました。鯛だけは「めでたい」ということで船主が持って帰りましたが、あじやさば等の残った魚は「お前たち勝手に分ける」と言われ乗船したもの皆で分けました。あんこうは誰も取りませんでした。冬場は船がもの凄く揺れ、15分も乗っていると嘔吐し、30分もすると身動きできなくなりました。酔い止めの薬を飲んでも効きませんでした。

金田さんは入社から1977年10月に新潟鐵工所大山工場に異動するまでの6年7か月間、新潟造船工場の外国船建造の現場で忙しく働きました。漁船メーカーだった新潟鐵工所には、外国船建造のノウハウが少なかったことから、完成後に外国の検査官からエンジン場などの通路に出ている配管の修正等を要求され、配管をやり直すことなどで納期が遅れることもあり、「ペナルティーも結構支払ったのでは」ということでした。そして、「そういうのにハイハイと言ってた連中、何人もノイローゼになって入院しましたよ」と話を結びました。

1977年11月、会社から、「国鉄が気動車の台数を増やすから、若いのは大山工場に行ってもらわなければならない」と言われ、金田さんは自宅近くの新潟鐵工所大山工場に異動になりました。当時、新潟鐵工所は、鉄道車輛のディーゼル動車（気動車）のトップメーカーでした。1975年以降、製作以来20年以上経過していた国鉄のディーゼル動車の更新需要が強まっていたことから、新潟鐵工所は、ディーゼル動車更新のためキハ40と47の2形式を試作しました。キハ40は、寒地、酷寒地用の両運転台付きで、キハ47は、本州暖地用の片運転台付きの車輛でした。いずれも180馬力エンジンから220馬力エンジンにパワーアップされ、暖房性能やメンテナンスフリーの向上が図られた他、車内設備も改善され近代化されました。キハ40と47の系列は量産化され、大山工場では、1982年までに503両が生産されました。金田さんもキハ40と47の製造に従事しましたが、キハ40、47については、「オレンジ色がかった車両でお金のかかった車だった。それまでの真四角で不格好な車両と違い見た目もよかった。（国鉄が）うちと富士重工とで競争させて、毎年、出来たのチェックして、出来の良い方の両数を増やすみたいなことをやっていった」と話してくれました。

ディーゼル動車の製造は、完全分業制でしたが、金田さんは、キハ40と47の各車輛下部に取りつける軽油を入れる燃料タンクや燃料配管を担当しました。忙しい時は、キハ40を一日1台、二日で3台のピッチで製造したということでした。様々な作業がありましたが、40～50人の若い作業員が従事していました。ディーゼル動車は、エンジン音がうるさかったことから各車輛に水平対向エンジンを取り付ける前に、車輛下部の取り付け部分の周囲にアスベスト吹き付け材を吹き付ける作業が行われました。吹き付け後は吹き付け材が落ちないようにボードで蓋がされました。燃料配管を取り付ける時は、吹き付け材がある部分に穴を開けたり、ほじくり返したりして触ることがありましたが、金田さん曰く、アスベストばく露の量については「造船みたいに馬鹿みたいに吸った記憶はない」ということでした。

金田さんは、ディーゼル動車の製造以外、オハ50やオハフ50と言われる客車の製造にも従事しました。1978年、国鉄は、老朽化が著しかった一般用客車を更新することになり50系客車が新製されました。内地向けの車輛がオハ50とオハフ50で北海道向けとしてオハ51やオハフ51が制作されました。新潟鐵工所は、1982年までにこれらの形式の客車を496両製作しています。

金田さんは、「車輛は台数作るから、一箇所クレームが出ると日本中回らなければならなか

ったので大変だった」と回想しました。50系客車内の両サイドにはスチーム暖房配管が走っていましたが、暖房するため機関車から蒸気を送ると配管の両端が伸び、配管を支えるストッパーの金具が曲がるという現象が発生しました。ストッパーが曲がると異音が出るうえ、配管に亀裂が入れば乗客が火傷をする恐れがあったことから根本的に直せということになりました。伸びた配管がスライドできるよう、配管両側にローを取り付ける修理を行うため、金田さんは、敦賀や函館、苗穂（札幌）の車輛基地に派遣されました。派遣されると1週間は作業をしていました。

海沿いを走るキハ40、47の薄いステンレス製エンジン冷却配管に巻いてある動物毛の保温材部分に塩素ガスが発生し穴があく現象が起きたこともありました。この時も配管の交換や穴の溶接の為日本中を出張しました。この他、マニ50型式荷物客車の車掌室の水タンクが冬場に凍結することが分かったことから重く大きいタンクの交換のために出張することもありました。マニ50型式は、1977年から1981年までの間に大山工場で141両が製作されました。

国鉄の更新車輛製造が一段落した1985年、金田さんは、子会社の新潟機電サービスに出向となり、今度は電装関係の仕事に従事することになりました。最初は、大山工場内に設けられた基板工場での勤務で、温めた鉛の槽にコンデンサー等が付いた基板を浮かべてロウ付けをする仕事に従事しましたが、残業が長時間になる職場で子供がまだ小さく、保育園の送迎もしなければならなかったことから鉄道車輛の運転台の計器盤の電装作業に変えてもらい従事したり、長岡工場で製造している射出成型機に設置する配電盤の取り付け作業などに従事したりしました。配管の仕事をしていたのに電装関係の仕事に異動になり大変だったのではと筆者が金田さんに聞くと「だれも教えてくれねえけど、毎日やっていれば自然と覚えていくもの」という返事が返ってきました。

途中、配管で1年間新潟造船工場へ応援に行き、1987年からは1年間、電装の仕事で新潟造船工場へ応援に行きました。この頃になると吹き付け作業後に送風機を入れて粉じんを飛ばすようになっていました。船の電線は通常の電線を鉄のメッシュで補強してあり太く重いものでしたが、それを壁や天井に配線をしていきました。

1993年2月に労働組合にかけあい新潟鐵工所に復帰し、名古屋の会社から受注したトレーラーシャーシの製造に従事しました。まだ、アンチロックブレーキシステム（ABS）が付いていないシャーシでしたが、ABSを取り付ける前の駆け込み需要で100台程製作しました。車輪を付けて、ランプなどの電装をし、仕上げまで一通り金田さんが担当しました。トレーラーシャーシの製作の後には、「トレーラーと同じだからやれ」という理由でライトレールトレイン（LRT）の製造に従事しました。当時は、ガラスや台車など特殊な部品は全てヨーロッパから輸入し、車体は日本で製作し組み立てましたが、その後、全て国産になっていきました。最初にLRTを製作した時は、熊本市交通局に収めに行き、沢山のマスコミが来ていたのを記憶しています。

1998年、金田さんが勤務していた大山工場は、老朽化を理由に閉鎖され、北蒲原郡聖籠町に新潟機構工場として移転、設置されました。

2001年11月27日、新潟鐵工所は、東京地方裁判所に会社更生法の適用を申請、受理され、経営破綻しました。負債総額は約2,270億円でした。金田さんは、新潟鐵工所が倒産したことを、「家に帰ってテレビを見て知った」と言います。倒産後も毎日、新潟機構工場に出勤し、仕事は途切れず、給料の遅配もありませんでした。前述した通り、新潟鐵工所の経営破綻後、新交通システム、鉄道車輛、除雪機械、産業用車両部門は、石川島播磨重工業（現：IHI）に営業譲渡されました。そして、同社の資本により2003年2月3日に新潟トランス株式会社が発立されましたが、金田さんも同社の社員となりました。退職した

のは62歳になった2015年3月でした。退職を決意した理由については、62歳で厚生年金が満額もらえるようになったことと、妻から3人のお孫さんの面倒を頼まれたからでした。

金田さんは、石綿肺の進行を抑制する作用のあるオフエブカプセルを朝と晩に服用しています。オフエブカプセルの副作用には吐き気があり、薬を飲んでから2時間半もすると吐き気が来ます。晩の吐き気は、寝るまで続きます。吐き気は気にすると凄く気になりますが、大丈夫と自分に言い聞かせると我慢できるということでしたが10日間に1回は吐くことがあります。下痢も副作用にあり毎日下痢止めの薬を飲んでいますが、下痢止めを毎日飲むと便秘になることから、通院している女性の歯科医に話してみたところ、カプセルの中に入っている薬を分割して飲むようにしたらよいとのアドバイスをもらったことからそのようにしてみたところ、下痢が収まり、便秘も無くなったということでした。体重減少の副作用もあるそうで、72キロあった体重が、コロナワクチンの接種で2、3キロ落ちた後、さらにオフエブカプセル服薬で落ち、ここ1年は、62キロから63キロの間で落ち着いています。

シアル化糖鎖抗原 KL-6 は、肺にあるⅡ型肺胞上皮細胞で作られる物質ですが、間質性肺炎を発症すると血液中の KL-6 が上昇することから、間質性肺炎の診断や活動性を評価する指標として用いられています。基準値は500U/mL 未満ですが、最初検査をした時、金田さんの KL-6 は900台でその後、1000台になりましたが、オフエブカプセルによる治療が始まり900台に戻りました。

金田さんが新潟造船工場に配管工として勤務したのは、1971年春から1977年10月までの6年7か月間です。毎日、吹付けアスベストの漂う船内でスプリンクラー配管の点検を行っていた訳ではありませんでしたが石綿肺を発症したことから、この時に金田さんが高濃度のアスベストにばく露したことが推認されます。金田さんの、「石綿は怖いですね。恐ろしいね」という言葉が筆者の心に残りました。

厚生労働省の令和4年度石綿ばく露作業による労災認定等事業場公表を参照すると、新潟造船工場では、12名がアスベスト関連疾患により労災認定され、大山工場では、12名がアスベスト関連疾患で労災認定されています。内訳は、新潟造船工場では、肺がんが7名、中皮腫が5名、大山工場では、肺がんが4名、中皮腫が8名でいずれも石綿肺での労災認定は出ていません。尚、これらの被災者数は、全て新潟鐵工所の従業員で下請け会社従業員の人数は含まれていません。筆者が調べたところ、新潟興機という新潟造船工場の協力会社で1名、石綿肺による労災認定を確認することが出来ました。新潟興機について、筆者が労災請求支援をした胸膜中皮腫を発症した新潟鐵工所元社員の男性に電話で聞いてみたところ、船舶電装業の仕事をしている会社で従業員が10名もない会社と教えてくれました。患者男性は、新潟興機の社長も知っているとのことで、同社社員で中皮腫を発症した2名の男性のうち1名については、「(中皮腫を発症した男性の) おやじさんが俺と一緒にガスの切断の職場で働く外注さんだったから知っている」と話してくれました。



石綿肺に罹患した福田文夫さんが

ニチアスを相手取った損害賠償裁判の控訴審は1回で結審



岐阜県笠松町に住む会員の福田文夫さん（80歳）は、岐阜県羽島市にあるニチアス羽島工場で保温材や原材料の混合作業等に従事し、アスベスト粉じんにはく露したことから、じん肺症の一種である石綿肺と合併症の続発性気管支炎に罹患しました。

労災認定後、福田さんはアスベストユニオンに加入し、ニチアスとの団体交渉に臨みましたが解決せず、2018年11月15日にニチアスに対する損害賠償訴訟を岐阜地方裁判所に提起しました。コロナ禍を挟み、今年1月31日に岐阜地裁は、ニチアスが福田さんに対して1430万円の損害賠償を支払うよう命じる判決を言い渡しました。ニチアスはこの判決を不服とし名古屋高等裁判所に控訴していました。



5月30日、名古屋高裁で控訴審の期日が開かれましたが、1回で結審しました。名古屋高裁は、岐阜地裁の原判決を支持するものと考えられます。名古屋高裁の判決は、8月8日、13時10分に言い渡される予定です。

福田さんがニチアスで働いたのは中学校卒業後の1959年3月から退職する1970年1月までの10年10か月間でした。ニチアスでの福田さんの仕事は、保温材の成型作業や「別荘」と呼ばれる建屋での原料混合作業でした。

成型作業では、混合槽というお湯を張ったタンクにアスベスト等の原料を投入する時に、同じ建屋内で作業をしていた福田さんのうえにアスベストが降りかかりました。「別荘」という建屋内でのアスベストと珪藻土等、原料の混合作業では、コンクリートの床にぶちまけた原料をスコップで混ぜ合わせる時に大量の粉じんが発生し部屋中が真っ白になりました。

ニチアス羽島工場では、これまで93件のアスベスト労災が認定されていますが、会社に対して損害賠償訴訟を起こし認められたのは、福田さんを含めて3人です。

2015年9月14日、岐阜地裁は、ニチアスに対して2人の元従業員に4180万円の損害賠償を支払うよう命じる判決を言い渡し、一審で確定しました。この2人の元従業員は、福田さんの元同僚でした。福田さんの訴訟は、一審で確定せず控訴されたことから訴訟は長期化しています。

福田さんの訴訟では、中央じん肺診査医としての任務や、厚生労働科研労働安全衛生総合研究事業、労災疾病臨床研究事業の研究を推進する等の功績が認められたことから、昨年7月に令和5年度厚生労働大臣功績賞が授与された長崎大学の芦澤和人教授による、福田さんのじん肺は管理1相当であるという意見書をニチアスが岐阜地裁に提出していました。

（事務局 成田 博厚）

福井市で2年ぶりに相談会と交流集会を開催



中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会北陸支部は、6月1日(日)に福井市地域交流プラザでアスベスト被害相談会と講演会・交流会を開催しました。

午前中の相談会には、型枠大工として働いていた79歳の男性が家族とともに来場しました。そして、「型枠大工としてマンションなどの建設現場で働いているときに、アスベスト吹き付け作業と自分の作業が重なることがありアスベストにばく露した。平成22年に石綿健康管理手帳の交付を受け、定期的に健康診断を受けている。咳が止まらず、長期間、薬局で購入する市販薬を服用しているがよくなる」とお話を聞かれ、関西支部事務局の酒井恭輔さんと筆者とで相談を受けました。咳については内科を受診し医師の診察を受けるのが良いと思うとお伝えし、次回の石綿健康管理手帳による健康診断時に撮影する胸部画像を取得していただければ、患者と家族の会に協力してくれる医師に見てもらい、じん肺の有無などについて意見を聞くことができるとお伝えしました。

午後の集会・交流会には、12人が参加しましたが、そのうち6人が胸膜や腹膜中皮腫の患者さんでした。

冒頭、中皮腫サポートキャラバン隊理事長の平田勝久さん(68歳)の講演が行われました。平田さんは、会社経営者であった2018年8月に悪性腹膜中皮腫、ステージ4相当の診断を受け、抗がん剤治療や免疫チェックポイント療法等を受けてきました。キャラバン隊の活動には、2019年9月から参加しています。

平田さんは、キャラバン隊は、人との絆、必要な情報、良質な医療、安心な保障、新たな治療法を「つなぐ」ということを考えて活動しており、全国の患者さんの元へ出向いていく交流会や講演会の実施や毎週水曜日にZoomを使用し患者同士で相談に乗り合ったり情報の共有をするZoomサロンをメインの活動として行っていると話しました。Zoomサロンに参加する患者さんは、治療に難渋している方も多くいるということでしたが、明るく交流しているということでした。平田さんは、キャラバン隊が運営するみぎくりハウスYouTubeチャンネルで公開されている「中皮腫のこと教えてください」の動画についても紹介しました。全21話からなるこの中皮腫解説動画は、中皮腫の正しい情報をもっと知ってもらい1人でも多くの患者さんに納得して治療を受けて欲しいという思いを持った兵庫医科大学呼吸器外科の橋本昌樹医師とキャラバン隊前理事長の故右田孝雄さんが二人三脚で作上げたものだということで、平田さんは、橋本医師と右田さんの掛け合いで進行していく理解し易い動画なので是非見て欲しいと話しました。

平田さんがアリムタとシスプラチンを併用する抗がん剤治療を受けた時は水を飲んでも吐いてしまったり、お味噌汁やうどんの出汁の匂いがだめになり食欲が落ちたことから体重が



10キロ減少したということでしたが、会場の中皮腫患者さん達からは、自分は匂いがだめになったとか、食欲がなくなったとか、私は食べられましたなどの声があがりました。

平田さんは、石綿健康被害救済法の改正についても言及しました。現在、石綿健康被害救済基金には800億円が積みあがっていますが、石綿健康被害救済給付の支給のみに使われています。平田さんは、3億でも4億でも一部を治療研究に回してもらえれば色々な研究ができるが、経済団体などが反対し実現しないと話しました。平田さんによると台湾にも石綿健康被害救済基金のような制度があり、治療、研究、勉強会などにも使えるということでした。

平田さんの講演の後、キャラバン隊で活動する胸膜中皮腫患者の尾上一郎さん（69歳）がお話しをしてくれました。2017年7月、尾上さんの右胸膜に肉腫型中皮腫が見つかりましたが、当初、兵庫医科大学病院の医師からは余命6か月と言われていました。抗がん剤治療を1年間受けた後、2018年8月より免疫チェックポイント阻害剤オプジーボの単剤療法を受けました。肝臓に中皮腫が浸潤し6cm程の腫瘍ができていたことから、肝臓の腫瘍をラジオ波で焼くラジオ波焼灼術を3回受けました。肝臓に電極針を刺す大変な痛みを伴う手術でしたが、尾上さん曰く「そのおかげで今日いてるんじゃないかな」と思っているということでした。オプジーボの単剤療法を43回受けましたが、脳梗塞を9回繰り返し休薬となりました。休薬してから3年、中皮腫を発症してから7年目ですが、「右肺の腫瘍は、いてることはいてるけれど、活動はしていないよう」と医師から言われているということでした。

キャラバン隊で活動する腹膜中皮腫患者の中島喜章さん（67歳）にもお話しをしていただきました。新潟県燕市吉田で内科開業医をしていた時に腹膜中皮腫を発症し、2017年1月に確定診断を受けました。同年2月からは新潟大学医歯学総合病院でアリムタとシスプラチンの併用療法を6回、その後、7月からはアリムタ単剤療法を62回受けました。2021年6月からは、国立がん研究センター中央病院腫瘍内科でオプジーボの医師主導治験に参加し44回投与を受けましたが、2023年2月に心横隔膜角リンパ節腫脹で終了しました。4月からは、新潟大学医歯学総合病院でアリムタ単剤療法が再開され、80回実施されましたが、反応していたCA125という腫瘍マーカーが2023年末頃から上り始め、耐性ができたことから終了しました。今年5月からは、6回の予定でシスプラチンとアリムタの併用療法をもう一回やってみようということになり、腎機能への副作用を避けるため通常の8掛けの量を4週間毎に投与することになりました。担当医の教授からは、「6月にやって7月にやって効果が無ければやることがない」と言われているということでした。

石川県から初参加された65歳の胸膜中皮腫患者の男性もお話しになりました。まだ、会社で働いていることから、労災認定されたものの、環境再生保全機構から療養手当を受けているということでした。今後、キャラバン隊のZoomサロンに参加するため、松島さんのアドバイスを受けながらご自身のスマホにZoomアプリをダウンロードされている姿が印象に残りました。

最後に参加者全員で交流をしましたが、筆者は国鉄の車輛工場に勤務している時に気動車に使用されているパイプの断熱材などにばく露したことから胸膜中皮腫を発症した男性とお話しをしました。

次回の北陸での集会は、9月1日（日）の午後に金沢勤労者プラザで行う予定です。

（事務局 成田 博厚）

追悼 右田孝雄さん



pixta.jp - 76110857

(6月20日 大阪府岬町のご自宅で 成田博厚撮影)

中皮腫患者としてNPO法人中皮腫サポートキャラバン隊の代表を務められ、同じ病気に苦しむ患者と手を取り合って積極的に患者としての意見を社会に対して発信し続けていた右田孝雄さんが、2024年3月2日、ご自宅で家族に見守られながらお亡くなりになりました(享年59歳)。改めてご冥福をお祈りするとともに、右田さんの闘病と活動についてお話ししたいと思います。

気遣いの人である右田さんですから、口に出して大声で言うことはなかったのですが、私たちとのファーストコンタクトは必ずしも良かったとは言えません。そのため、「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」の活動に積極的に参加されるまで発症からすでに1年が過ぎていました。中皮腫に罹患された方にとって1年という時間がいかに貴重なものであるかは言うまでもありません。余命2年と確定診断時に伝えられた右田さんにとっては尚更だったと思います。

発症当初から右田さんはブログを開設し、同じく闘病生活を送っている中皮腫患者やそのご家族との交流を通じて「中皮腫・同志の会」を結成、情報交換をしたり、励まし合ってきました。全国の中皮腫患者に声を掛け、一堂に会すという、世界を見回しても例を見ないイベントを企画し、それを継続できた背景には、治療や病院とのやり取りを細かく発信してき

たこと以外に、明るくて愛にあふれる右田さんの日常を他の患者も共有してきたことが一因だったと思います。阪神タイガースファンという、好みが激しく分かれるようなものであっても、右田さんがブログに書けば勝敗に一喜一憂するひとりのスポーツファンの話として共感できることが多かったのではないのでしょうか。

「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」への加入は、先ほど述べたように発症後1年が過ぎてのことですが、はじめて私がお自宅にお伺いして1ヵ月もしないうちに右田さんは東京で開催された「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」による省庁交渉に参加してくれました。同じく中皮腫患者の栗田英司さんと一緒に「中皮腫サポートキャラバン隊」として活動するようになってからはさらにその活動の幅が広がっていきます。ちょうど省庁交渉当日に患者と家族の会の役員に披露された「7本の矢」、すなわち、①希望が持てる中皮腫患者の体験記の作成、②中皮腫ポータルサイトの設立、③中皮腫サポートキャラバン隊の結成、④標準治療確立のための仕組みづくり、⑤中皮腫フェスタの開催、⑥アスベスト情報センター設立の検討、⑦中皮腫患者100人集会の開催、は、いずれも目標を達成し、現在、中皮腫サポートキャラバン隊はNPO法人としてさらに積極的に被災者運動を展開しています。

右田さんの自身の活動範囲も全国におよび、どれだけ多くの中皮腫罹患者を勇気づけ、中皮腫で家族を亡くされた方を慰めたかについては言うに及びません。各地で開催される相談会に右田さんが来る、というだけで、始まる前から相談会が成功したような気にすらなります。また、患者さんからの療養に関する相談電話に対しては、まずは右田さんを紹介し、治療や心構えを説いてもらっていました。無理を押して海外にも遠征し、一度は熱を出して帰ってきたこともあります。

目標到達に向けて一直線に進んでいましたが、決して順風満帆であったというわけではありません。見送る側の辛さ、やりきれなさを何度も繰り返し経験されてきました。「また会おう」と別れたばかりの方の突然の訃報、少しずつ衰弱していく仲間の最期、そして自分にも確実に迫ってくる死への恐怖に何度も絶望を感じていたように思います。年中一緒に活動をしている私たちにその辛さを吐露することはできても、ひとりになったときに亡くなっていた仲間や自分の未来を思い浮かべると、心穏やかでいられるはずがないのです。また、対行政においては、患者からの意見が少しも顧みられないことにこのうえなく落胆させられていました。

それでも自棄を起こすことも投げ出すことなく、右田さんは前向きな情報発信を続けてきました。当センターの機関誌「関西労災職業病」に6年間、「死ぬまで元気です」というタイトルの67回におよぶエッセイを寄稿してくれました。また、右田さんの活動の源流とも言えるブログを見直してみると、2016年7月17日から7年8か月の間、1万回を超える投稿をしています。そこには常に仲間や友人、家族に対する感謝の言葉が綴られています。憤りにはユーモアを交え、そしてスポーツや音楽、日々の暮らしなど右田さんの好きなものを存分に添えて、これからも新たに中皮腫に罹患した方々の心の支えになっていくでしょう。

以上



関西労働者安全センター 酒井恭輔



★暑中お見舞い申し上げます★

暑さ厳しくなってきました！
くれぐれもご自愛ください。



事務局からのお知らせ

【夏期休暇について】
8月11日（金）～8月17日（木）



熱中症に
ご注意ください！



労職研の活動

2024年4月					
	12日	名古屋労職研事務局会議		24日	日本冷熱訴訟判決期日傍聴
	26日	名古屋労職研事務局会議			

2024年5月					
	10日	名古屋労職研事務局会議		24日	名古屋労職研事務局会議
	30日	福田氏訴訟 控訴審			

【労職研 会費・カンパ振込先】

郵便振替 口座番号 00860-5-96923
加入者 名古屋労災職業病研究会

発行 名古屋労災職業病研究会

発行者：森 亮太

名古屋市昭和区山手通 5-33-1 杉浦医院 4 階

Tel./Fax.052-837-7420

e-mail: roushokuken@oregano.ocn.ne.jp

<http://nagoya-rosai.com/>